

超小型トンネルフリーザー開発

省エネと食品の高付加価値化に貢献 戦略機種 投入へ



鳴田 友和社長

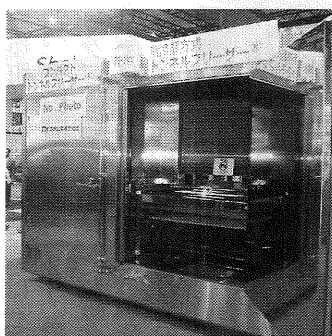
連続式フリーザーのトップブランド「トンネルフリーザー」(登録商標)

を製造・販売する高橋工業(社長||鳴田友和氏、本社・大阪市西淀川区竹島5-8-7)は、6月12-15日に開催された国際食品工業展「FOOMA JAPAN2017」で同社初となる超小型トンネルフリーザーを初公開し、トップメーカーとして技術開発面で最新トレンドを発信した。

超小型の筐体でありながら、優れた冷却性能で省エネルギーと食品の高付加価値化に貢献することを目的に開発したものを、同社が従来主力視してきた冷却技術を抜本的に見直し、超小型機種向けに専用設計を施した。開発機を実売レベルにまでブラッシュアップした後、戦略的な新機種として市場投入を目指す。

開発機は連続式フリーザーの分類で筐体が全長3.5mという超小型サイズ。同社の冷却技術のコアパーツであるスーパージェット(SJ)ノズルを使用した冷却方式を採用しているが、開発段階でSJノズルの形状、ピッチ、取り付け構造など細部にわたってゼロベースで見直した。超小型機種向けの専用設計を施している。同社はこれまで、顧客要求に基づく特注対応で全長4.5mの連続式トンネルフリーザーを製品化したことはあるが、全長3.5m、しかも量産に適した汎用タイプを開発したのは今回が初めて。開発機の前後にコンベアを接続しても全長5.5m以内収まることから、設置スペースが狭小な食品工場やセントラルキッチンでも導入できる可能性が広がる。連続式フリーザーでの超小型化を実現したことで、熱源となる冷凍機はトンネルフリーザーで一般使用される大型のスクリーン冷凍機から小型のスクロール冷凍機に変更できる。これにより熱源機の初期導入コストを減らせる。

鳴田社長は「新機種開発に至った経緯について「当社は食品工場を中心に多くのトンネルフリーザーを納入し、お客さまからご支持を頂いてきた。しかし一方で、これまでトップメーカーとして斬新なフリーザーの提案が十分できていないと感じる部分もあった。こうした中、以前から当社



展示会に参考出品した超小型トンネルフリーザー

8月中旬にコンセプトに基づき改造を終え、実運転による性能試験を実施する見込み。現状では来年の発売を予定するが、鳴田社長は「既に発売をお待ちいただいているお客さまも居る。性能試験の結果が良好であれば、今秋の市場投入もあり得る」と話している。